
2年B組の月日

榛原 藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2年B組の月日

【Nコード】

N4388L

【作者名】

榛原 藍

【あらすじ】

2年B組の日常に続いての生徒会作品です。オリジナルですので、前作より見劣りするかと思います。ある日の昼休みのお話です。

よう、みんな。俺は杉崎鍵。人類史上最高のハーレム王だ！王になる仮定として猛勉強した俺は、今では学年トップの学力を有している。そんな俺にとつて、今受けている授業は成績のために重要ではあるが、レベルの問題で、やや退屈だ！もつと有意義な授業がしたいな。守にも持ち掛けた、一般相対性理論と量子論を整合化した量子重力理論も然り。

「地の文でまで自尊心高いと軽蔑対象を通り越して崇高な存在に見えてくるから不思議だな。…低俗極まりねえのに」

そんな俺を尊敬と信頼の目で見つめるのは同じ生徒会メンバーでありクラスメイトの椎名深夏。こつ見えて、こいつは俺の実質的婚約者アアアアアア！」

無言で深夏が俺の間接を決める。

「……………」

「ちよいそこの百合！普通はこついうリアクションされたら否定するか一旦腕はなして次のボケに備えるだろう！？」

「じゃあ、違う」

ぎりぎりぎりぎり！

「前者のみ選択したっ！？ヒヤッホウ！意識が朦朧としてきたぜい！」

俺が快樂すら感じた瞬間、深夏はやつと手を離れた。

「つたく……」

おふざけが過ぎたかもしれない。さすがの俺も自重し、武勇伝の扉を開けた真擬留先生の話に耳を傾けた。

昼休み。基本的に、この時間は昼食を摂るために使われる。早々にそれを済ませた俺の周りには、いつものメンバーが集まった。前に小説化したときに登場した宇宙姉弟と、深夏、それと真冬ちゃん

の涼宮八。ヒ的能力(?)によってリアル世界に出現した、中目黒の四人。無自覚なのかもしれんが、この中目黒は俺に依存…いや、危険な感情を秘めている節がある。危険人物NO.2だ。ちなみにNO.1は真冬ちゃんだったり知弦さんだったりする。

「というわけで、今日はみんなの将来について検討しよう!」

俺は意気揚々と宣言した。会長気分だ!すると、巡が鼻を鳴らして、

「ふんっ、決まってるじゃない。私は世界最高峰のトップアイドルに上り詰め、夫と子供に囲まれて裕福な暮らしをするのよ」

「はっ!戯れ言も休み休み言え。今でこそ一部のコアな人々の人気を得ているが、じきにフラ。デー辺りで本性暴かれて人気急下降!たちまち守を巻き込んでお笑い界にデビュウウウウ!!?」

「んもう 正直に本心いえばいいのに」

コブラツイスト。体のあちこちから悲鳴が聞こえる!

「俺は今人生最大の本心を言った首が分度器一枚じゃ図れない角度にいつ!?!」

いかん。頸椎が!

一分後。

「うん、じゃ次守いこうか」

「おい、鍵。顔こっち向いてないぞ?」

深夏が言った。無理もない。今の俺は、後頭部がピッタリ背中にくっついてるからな!

「うん、なんか寂しい風景が広がってる」川あるし。手招きしているお姉さんが向こう岸にいつぱい」

「帰って、こい!」

深夏が俺の頭をつかみ、本来あるべきところにセットする。

「うおう!一瞬稲妻が走ったが視界が定まった」

「視界というより別世界だったみてーだがな」

呆れたように深夏が言った。まあ、いい。

「さて、守。数少ないお前のターンだ」

「なんだよ数少ないって！俺は中心メンバー……」 「よし、深夏。お前のターン」

「無視すんなよお！わかったよ！言うよ！話すよ！」

「早くしろ。あと三十秒しかないぞ」

「俺は時間制限あり！？畜生！俺の将来だろ？そ、そりゃあ、なあ？深夏？」

「ん？あたしはお笑い界に進出する気はねえぞ？」

「なんでそういう認識！？違えよ！」

「なんだ、違うのか？もう巡と吉。興業辺りに頭下げに行ってるもんかと思ってたぜ」

「違えって！俺は……」

「はい、時間切れ。守、帰っていいぞ」
時計を見ながら俺が言った。

「何も言っていないよ！？俺！おい、杉崎！」

「わかったわかった。吉本。業には俺から交渉してやるから」

「だからなんでお笑い路線！せめて最後まで言わせ……」

「わかったわかった。『宇宙姉弟』のコンビ名で交渉してやるから」
「そういう問題じゃねえ！」

「なんで私まで！？」

なんか巡まで入ってきやがった。

「そういうわけで、守選手、まさかのレッドカード。退場です」
「サッカー！？」

「まさかのカードでしたね。まあ、試合中に堂々と筋肉増強剤飲んで相手選手のあばら折ってりや当然ですけどw」

「笑うな！つかなんだその理由！もっとマシな……って、なんだよお前ら！何で担ぎ上げるんだよ！本気で退場させる気か！」

『御意』

「古風な言い回しでチームワーク抜群だなお前ら！……ってえ！落とすことねえだろって、扉閉めるな！」

『カチャッ』

「誰だよ！わざわざ息合わせて『カチャッ』とか言いながら鍵閉めた奴ら！おい！コラ開ける！おい！おい！……。……。ねえ、開けて……？」

クラスメイトに閉め出され、涙声になる守。面白すぎるw。

「さて、深夏。お前のターン」

守の心細そうな声をBGMに、俺は深夏の方を見た。

「あたしか？あたしの将来はこないだ話したからいいだろ？」

「ああ、そっぴやそうだったな」

「ああ。堅実に……」

「俺のお嫁さんだったか」

『なに！？』

巡と、場外の守から声が上がった。あの地獄耳め。

「どういうことよ、深夏！？」

「杉崎イ……」

「ひどいよ杉崎君！僕はどうなるのさ？」

「中目黒！お前の反論だけはいただけない！」

「鍵！てめえ！誤解生むようなこと言うんじゃない！」

「わかったわかった！改竄したことは謝ろう！ただのお嫁さんだったかな」

「だからそれは子供の頃の話！」

「今は？」

「え……。いや、ち、違っに決まってんだろ……」

気恥ずかしそうに俯く深夏。多分、みんなもうわかったらうなあ。今でも夢見てること。

「さて、最後は中m……」

「僕はね杉崎君！」

「近い！危ない！気が早い！」

「僕の将来はね、写真家だよ」

「おつ、案外普通」

「いいじゃねえか、善樹。お前そういうの似合いそうだぜ」

深夏も賛意を示した。

「ありがとう、深夏さん。それでね杉崎君。綺麗で素敵な物をたくさん写真に収めて、僕一人の、世界にひとつのアルバムを作るんだ！」

輝くような笑顔。ほんとに写真家になりたいんだなあ。俺だけでなく、その場にいるみんながそう思っただろう。

「だからさ、杉崎君」

「ん？」

「モデルになつてくれないかな？杉崎君の一生を記したアルバムを

…」

「やめろおおおおおお！！！！」

俺は涙すら浮かべて叫んだ！冗談じゃない！

「目を覚ませ中目黒！気をしっかり持て！お前は男だノーマルだ！モデルには普通！女を使うべきだろう！その方が華があるぞ！」

「えっ？でも、杉崎君素敵だし…女の人と見劣りしないよ？華もあると思うなあ…」

なんか赤くなつてウツトリこつちを見てやがる。いかんいかんいかんいかんいかんいかん！！

「違うんだ中目黒！女には女にしか引き出せない魅力があるんだ！男の俺には不可能な！」

「魅力とか、そんなの関係ないよ。僕はただ、杉崎君と一緒に杉崎君の写真撮っていられば幸s」

「さらば碧陽学園！俺は旅立つ！」

俺は何故か手近にあったリヤカーを引いて、涙を流しながら教室を出て行った。

「す、杉崎君！？どうしたの！？」

「来るな中目黒！俺は、俺はなにを犠牲にしても、真冬ちゃんのシ

ナリオに従わないと決めただつ！」

そこで、同じく別の意味で目を潤ませた守が立ちふさがる。

「杉崎イー！さっきの話は本当かあつ！」

俺は敢えて守の真横を通過し、

「嘘だ！みんな、みんな嘘だつ！俺が生まれたことも、真冬ちゃんのスキルもっ！宇宙の誕生も然りっ！」

「す、杉崎？お前言ってることが滅茶苦茶……」「がふえッ！？」

瞬間、俺の体が宙を舞った。リヤカーごと、廊下を舞い、鈍い音を立てて落下する。

「……どこへ行く杉崎。もう午後の授業が始まるぞ」

真擬留先生だった。相変わらず、人間離れした怪力だ。深夏と負けず劣らず……か。

そうして俺はクラスメイトの誰かに引かれて教室へ連行された。

その夜、俺は今日聞いたみんなの夢、将来を思い起こした。

ああは言ったものの、巡は既にトップアイドル入りを果たしているし、あいつの言う理想も、遠からず実現されるだろう。

守も、いつものノリで軽くはじいてやったけど、お人好しで努力家のあいつなら、友達にも恵まれるだろうし、自分自身で障害を乗り越えて、どんな夢でも実現できそうだ。

中目黒は、ちよつとずれてるところがあるけど、根はあまりにも純粹で、一生懸命だ。転校しようとする動いたって聞いたときは、すげえ奴だと思った。あの勇氣と実行力、『強さ』があれば、世界に名の通る写真家にだってなれると思う。ジャンルは認めないし、モデルになるつもりもないが。

深夏は、堅実に生きると言っていた。真冬ちゃんを養うとも。俺が養うと言ったとき、あいつは口じゃ刺々かったけど、嬉しそうな顔してた。本気で、幸せにしてやりたいって思った。あいつなら、持ち前のガッツで、幸せを掴み取れると思う。どんな些細なことでもいい。あいつを支えてやりたい。支えてやる。それが、不抜けて

いた俺を立て直してくれた、あいつへの恩返しだと思っから。

これから、たくさんの月日を重ねて、みんなが夢へ突き進み、叶えられれば、俺は嬉しい。

え？俺の夢？決まってるんだろ。

みんなが幸せになることさ。

（後書き）

どうも、白翼改め榛原です。連載をご希望の方がいらっしやいました。が、予想以上に高校生活が忙しく、連載作品を今以上抱えるのは厳しいと考え、時々短編で投稿することに致しました。

次の投稿がいつになるかは明言できませんが、大体月1の割合で投稿するつもりです。

原作の法則に沿い、日月火水木金土に因んで題名をつけますので、7話で完結です。

それではこれからも応援よろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4388/>

2年B組の月日

2010年10月8日14時51分発行